

令和六年八月吉日初版作成

魂の進化

高嶋善二郎

目次

- 魂の進化とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
- 自他一体の心、愛を深めることが霊的進化・・・・・・・・4
- 神界の愛を現わすための留意点・・・・・・・・・・・・6
- 光明思想の体験を積み重ねる大切さ・・・・・・・・・・7

お願い

より分かりますやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいところや、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

次の連絡先にご願ひ致します。

(スマホ) 09033466919

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

魂の進化とは

魂の進化とは、どういふことをいふのですか。この質問に対して、整理していきます。

魂とは、分霊のこの肉体界での相（すがた）と言われています。

分霊は、神そのものですが、この肉体界に降りてくる過程で、幽体、肉体を身につけて来ているのです。

私たちの心を五井先生のみ教えを通じて整理していくと、二つの心があることに気付きます。

一つ目の心は、肉体をもっていることにより生じる心、眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心等、自然（じねん）の心に相反する業因縁の心なのです。

もう一つの心は、分霊自身もっている、自然（じねん）の心ともいわれる、本心（神聖）であり、大自然の根源の働きをする生命を、その智慧能力で、大調和達成のために生かしまつてゆく働きであり、「愛深き心、美しく清らかな心、真をつくす心、善事をなす心等々、すべて

人間生活を高め、深める心」（『続宗教問93』）といわれています。

人間が本心を感じられなくなったのは、肉体界に住み続けることにより、しだいに肉体人間そのものになってきて、肉体外の六官（直感（直覚）（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられないようになっていったことによりです。この心が習慣化され、自己の想念行為によってつくった環境を輪のように廻り続けることになり、つまり自己の想念行為のままに、生まれ更りして、肉体界と他界（幽界、靈界の下層、ヨガの教えでいえば、肉体、アストラル界、メンタル界）を往ったり来たりして生活してゆくことになったのです。この状態を輪廻といい、自己の想念行為の波に乗って廻りつづけるという法則が出来ており、輪廻転生の流れ（貧者病死の苦界）がくりだされ、この世界から解脱できなくなったのです。

この本心は、五井先生を通して、私たちは、個々人に備わっている

ことを教えて頂き、自分の神聖や人類の神聖を復活させ、この肉体界を愛と大調和の地上天国(五次元世界)に移行させるようとして日々私たちは、取り組んでいる心です。

魂の進化とは、宇宙神のみ心である、愛と大調和(真善美)の世界を顕現することであり、当面はこの業因縁の世界を愛と大調和の世界に変容させていくことであると言えます。そのためには、祈りや印により、神聖との一体観(自分の神聖の復活)を得ることが必要です。

何故かといえば、神聖(本心)の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していくとも言われているのです。

業生の世界では、消えてゆく姿など、外部の刺激を受け、まず感情想念が動き、それに続き、潜在意識にある分別心が働き、行動として現われます。例えば、人から何か刺激が与えられたら、それが自分の利害に合えば、喜びという感情想念になり、相手に感謝となり、それが何ならかの形で、相手に感謝の行為になります。

また自分に対して、書を与える行為に対して、怒りまたは悲しみの感情になり、それに対してもなんらかの反発の行為となって現れます。

しかし、神聖との一体観を得ると、自分の意識波動が高くなり、そして自然と、臍下丹田に息がおさまり、いかなる感情想念がおそってきても、またいかなる消えてゆく姿を前にしても、動じなくなります。心は、感情想念ではない悦び(よろこび)に満たされ、無心の内に相手に対し愛の光を送ることが出来るようになるのです。

自他一体の心、愛を深めることが霊的進化

先に魂の進化について「当面この業因縁の世界を愛と大調和の世界に変容させていくこと」と言及したところですが、これをどのように具体的に展開しようとしているのかの視点から整理してみましよう。

これを整理していく上で、ヒントになるのが、次のお言葉です。私たちの天命は、「人間は霊であり、肉体はその一つの現われであって、人間そのものではない。人間とは神の生命の法則を自由に操って、この現象の世界に、形の上の創造を遂げてゆくものであると識り、神我一体観、自他一体観を行動として表現してゆく」ことである。

宇宙の法則に乗るとは、自分が神のみ心と一つになって生きていくことであり、自己のあらゆる動きが、そのまま他の人のためにもなり、人類のために役立っている状態といえる。何故ならば、神のみ心は、大調和であって、すべてを生かすことに、その目的があるからである。自己の生命を自由に生かしたい、のびのびと平安に生きてゆきたい、と思うならば、まず自己の心を自由の根源であり、生命の根源である、神のみ心神聖の中に入れきってしまうことが必要である。

神のみ心の中に自己を入れ切るということは、神のみ心と同じような心で生きてゆくことである。神のみ心とは、まず、平和な心ということ、すべてを自ら自身と観する心、こちら側からいえば、自他一体の心ということになる。別の言葉で言えば、愛ということになる。

人間は肉体界に住みながら、神霊の世界に住んでいるのであり、想念が神霊の世界のひびきに通ずれば、神霊の世界にその人の生活の重点が置かれるのであり、その人は肉体界に存在しながら、神霊のひびきである、高い深い叡智に導かれて生活できるのである。

自他一体の心、愛を深めていくことは、他の人と色々な交流の形を通

して、相手を思いやり、お互いに助け合い、お互いの生命を輝かせながら、霊的進化を遂げるということである。

実は、私たち分霊は、別々の光線に分かれて、別々の働きの特色を持っていて、お互いの心が通じ合え、霊的進化を遂げられる生命の働きを内にもっているのである。

神は大生命であり、大霊である。この大霊が、七つの霊に働きを分けて、いわゆる職能というか、働きの特色というか、使命というか、ともあれ、七つの色に分かれた。これを七つの直霊という。この七つの直霊が各自のいのちを働かし、互いに交流し合い助け合って、この人類世界に、やがて神の世界を完成しようとしているのである。

この七つの直霊から、分霊が生まれ、その分霊から又分霊が生まれているが、その分霊たちは、いずれも、七つの直霊の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特色の裏面で、この特色を助けて働いているわけで、各分霊がそうした一つの特色と、六つの補助的働きをもって活躍しているのである。

例えば、紫の働きをもつ直霊から生みなされた、紫の特色をもつ分霊は輪廻転生を繰り返しながら進化するの道をとっていくその過程においても、本来の特色である紫の本質的働きは変わらないが、その

特色は内に隠されて、今生においては補助的働きの一つである青の要素を強く表に現わしているかもしれない。しかし人間は自分の特色の他の六つの要素の働きを、その時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となって直霊に帰一していく道をたどっていくのである。そうした神の働き、光の輝き、生命の働きを、人間各自は、自己のうちにもっていて、この生命の働きを、天命通り、天の使命通りに働かせ得る人、運用出来る人を神の使徒といい、自己の運命を完成させた人といい、天命を完了した人なのだ、五井先生は解説されています。『白光への道』

神界の愛を現わすための留意点

しかし、この地上界には神界の愛という心がそのまま現われにくいと言われているのです。何故でしょうか。

愛は執着の想いを伴いやすく、愛の心の流れが、把われの想いで、一つとところ、一つ想いに止まってしまう、愛することが苦しみとなり、愛されることが重荷となり、神のみ心を離れた、神のみ心の中にはない、消えてゆく姿的な業想念波を巻き起こして、そこに不幸や悲劇が

生まれているのである。

これは、普通、愛と簡単にいわれているものは、ほとんどが、業想念（因縁）と業想念との融合によって行われるか、業想念の自我欲望の満足を愛と思いついてからである。つまり執着、執愛、自分の生命を縛り、他の生命を自我欲望のために縛りつけてしまっているからである。言い換えれば、純粹なる愛（神）の行為が、直接その光のままに行なわれる時には、肉体人間にとって、あまりにもその光が強すぎ、峻厳すぎるのを、適度に薄め弱めてこの地上界の肉体人間に適合するようにしてゆくところが情であるが、この地上肉体界は現在では、神の心と業想念の二つが入り交じって出来上がっている世界なので、情というところは、愛（神）の面と、業想念（執着）の面とのどちらにも働きかけてゆくのので、うっかりすると、愛情だと思っている行為が、いつの間にか、業想念という執着の方に流れていっている場合があるからである。

このようになってしまふのは、愛する、ということが、光を他に与えることである、という神のみ心、つまり原則を知らないから起きているのである。また、愛されたいのに愛されないのは、自分が相手を愛さないからだということ、その人は頭で知っているかもしれない

いが、心ではわからないからであると五井先生は言われているのです。

光明思想の体験を積み重ねる大切さ

以上この業因縁の世界を愛と大調和の世界に変容させていく具体的な展開の仕方について、留意点も含めて整理してきました。これらの真理を踏まえ、昌美先生のお言葉を借りれば、「日常生活の小さな光明思想の体験の結果から心に自信を与え、よろこびと幸せを噛み締めてゆくことが大事」なのです。それは何故かといえば、「それを積み重ねてゆくと、ある時世界的な大災害や突然の状況に立たされたとしても、日頃の光明思想徹底行の積み重ねで、すべてのいかなる状況からも逃げず恐れず受容する心構えが出来、いかなる大難も小難に変え、さらには自分を含め自分の周りが、すべて無傷で終わってしまうのである。」(白光誌2002年11月)と、その理由を言及されています。

また私たち神人は、2003年から2009年まで、宇宙究極の光を降ろす「神事」に取り組み、地球人類を代表して叡智の(第六)チャクラを開き、宇宙神から直接光を受けることが出来るようになり、

2012年7月大行事の大成を果たした結果、政治経済の低迷、宗教対立、民族紛争、国家間戦争、疫病、原爆、テロ、あらゆる人智、あくなき欲望にて作り出してきた大カルマによる、これから生ずる大災難を救いうる神力が調ったという秘神示を頂いたのであります。

それは、「これから大災難が生じようとも、いったん7月に授かった神力は、どんどん神人の器に注がれ、神人の存在するところから大生命力の光、パワーが周囲に波及し、そこに共にいる人々は救われてゆく。我々神人は、これらなお一層自らを磨き高め上げ、限りなく宇宙神の力を受け入れる器になり、Xデーが来た時、見事に自らの神力を発揮し、限りなく世界中くまなく光が遍く届くよう、そして一人でも救われない人が存在しないよう、大光明意識に徹して、今日も皆様方とともに神事を果たしてゆくのである。・・・それだけ限りなく自らを磨き高め上げるならば、宇宙神より神力を十倍授かることが可能となる。すると十万人の神人と同じ働きをすることになり、地球上におけるすべての予言は覆されることになるであろう。」(白光誌2012年11月)というものです。

この秘神示は、私たち神人にあらためて大きな自信と勇気を与えてくれます。あとは、「実践遂行」あるのみでしょう。